2016 年度は、環境動態学専攻も含め大学院・学部ともに改組に向けて継続的に議論が行われ、ようやく概要がまとまってきたところです。ずっと昔は、大学院や学部の名前は文、理、工など単純でどこの大学もよく似ていましたが、時代の変化につれて名前は長く複雑になってきました。ひと昔前には、研究領域の名前の前に「環境」・「情報」・「国際」などのキーワードをランダマイズして付けたような大学院の名前が各地で氾濫して、所属している教員に聞いてもあやふやだったことはまだ記憶に新しいところです。そうはならないように、なんとか知恵を絞ったわけですが、新しい名前が社会的にも学内でもすみやかに定着することを願っています。議論に積極的に関わっていただいた教員のみなさまに感謝します。

2016 年度は、博士前期課程が計 41 名、博士後期課程が計 9 名でした。修士論文発表会は 2 月 8 日に行われ、20 名が修士号を取得し、それぞれが社会人として旅立ち、あるいは進学してさらに研究を深めることとなりました。博士後期課程では、1 名が博士号を取得しました。大学院卒業生の活躍に期待します。

今年からの新しい試みとして、大学院生向けに試行的に研究倫理セミナーを開講しました。この数年、とくに生命科学において大きな研究不正が次々と報道され、さらに研究不正に関連したパワーハラスメントの実態があらわになってきました。昔の研究不正とは異なり、研究室の主催者や大きな研究プロジェクトのリーダーが主導するトップダウン型の研究不正が目立つようになり、ポスドクなど若手研究者がこうした不正に巻き込まれるのをいかに防ぐのかが、大学院教育にとっても重大な課題として浮かび上がってきました。こうした状況を考慮し、大学院生に研究不正から身を守る知識と技を習得してもらうこと、研究者の社会的な立場や意義を理解してもらうことをセミナーの目的としました。来年度からは、環境研究倫理特論という正規の授業として開講することになりました。詳細は、年報に掲載されますので興味のある方はご覧ください。

この文を書いているところへ、代表的な科学雑誌である Nature が日本の科学研究力の急激な低下についてレポートを出したという報道が伝わってきました。ピペド（ピペット奴隷）などというポスドクの悲惨な状況や、すぐ役に立つ（と称する）研究の重視、大学院進学率の低下、経常研究費の削減、研究費申請のための膨大な事務仕事など、大学での研究を取り巻く状況がひどいことは、大学教員であればだれでも知っていることです。しかし、こうしたひどい状況については、残念ながら社会的にはあまり認知されていないようです。長年にわたる経済的な不況に伴い、企業では選択と集中を合言葉に大幅なリストラが進められてきました。大学における研究も同じように「選択と集中」すればよい結果が得られるだろうというのが、大学改革の目論見だったようです。しかし、優れた研究というのは長い時間が経った後ではじめてわかることであり、たとえ優れた研究者とはいえ未来を予見できる訳ではなく、むしろ有能であるがゆえに、その後の研究の進展の妨げにすらなることも指摘されるようになってきました。科学の有用性が予見できないことは、近年ノーベル賞をもらった研究、たとえばクラゲの発光とか細胞の自食といった現象が、後に発見した当人も驚くような重大な科学的成果に結びついたことを考えればよく理解できると思います。このことを逆に見れば、現在多くの研究者が画期的だとみなしている研究の多くは、すでに研究の最盛期を過ぎた可能性が高いということになります。研究の原動力は、知的な好奇心です。多くの人が「役に立たない」と思っている研究の中にこそ、未来の偉大な研究の胚子が眠っていることを忘れてはならないと考えます。今回の Nature の報道が少しでも状況の改善につながるように期待します。

環境計画学専攻のこの一年

高田　豊文
環境計画学専攻長

今年度は，全学将来構想委員会での議論を踏まえ，学部・研究科の組織再編が議論され，環境計画学専攻内でも地域環境経営・環境意匠のそれぞれの研究部門で構成や研究部門の名称変更等が検討された．特に研究科の組織再編では，これまでの 2 研究科から 1 研究科複数研究部門を目指すことが，研究科内で大筋合意された．今後も流動的な部分はあるが，教育・研究の質の向上が望める改革であることを期待したい．

2016 年度の本専攻での博士学位の授与者は，地域環境経営研究部門で 1 名，環境意匠研究部門で 1

名の合計 2 名であった．地域環境経営研究部門の朝田亘さんは 10 月の博士論文審査会を経て，「音楽による想起がもたらすコミュニケーションデザインについての研究」という論文題目で，11 月 30 日に博士（学術）の学位を授与されている（審査委員長増田教授，委員細馬教授・井手教授・高橋教授）．一方，環境意匠研究部門の金栄（ジンロン）さんは 2016 年 3 月の博士論文審査会を経て，「中国の集合住宅における緑地についての研究」という論文題目で，5 月 31 日に博士（環境科学）の学位を授与されている（審査委員長村上教授，委員芦澤教授・轟准教授）．

在籍学生数（2016 年 5 月 1 日現在）は，地域環境経営研究部門では，博士前期課程 5 名（M1 が 3 名，M2 以上が 2 名），博士後期課程 1 名（D3 が 1 名）であり，環境意匠研究部門では，博士前期課程 26 名（M1 が 9 名，M2 が 17 名），博士後期課程 5 名（D1 が 1 名，D2 が 2 名，D3 が 2 名）である．数年来続いている部門間の在籍学生数のアンバランスを解消することが，専攻としての課題である．

博士前期課程の修了者は，地域環境経営研究部門が 2 名，環境意匠研究部門が 15 名であった．